

土門 剛



土門 剛 どもん たけし

【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

8月になると官民双方による水稲の作況指数や作柄調査が出揃う。いずれも秋の収穫予想につながる情報だ。しかし、残念ながら参考になるような代物ではない。どちらも実態と大きくかけ離れた数字が出てくるからだ。

正確な作況指数がつかめなくなった

6日に公表してきたのは、民間調査会社の米穀データバンク。全国作況指数は「102」の「やや良」だった。ここが出す数字がアテにならないことは、本誌2010年10月号で取り上げた。そのときに指摘した

のは、気象データだけに頼る予測方法の限界だった。従来、この種の予測方法は有効だったが、昨今のうちに気象変動が激しく、しかも手抜き農法が蔓延している現場の実態では、正確な予測結果を得ることは難しくなったのだ。

手抜き農法とは、一発肥料と呼ぶ緩効性肥料に頼る農法のことだ。通常、春の田植え前（通常は耕起前もしくは代掻き前）に基肥を施し、夏

に穂が出る出穂の前に穂肥を施す。一発肥料は、基肥と穂肥を一つにして春の田植え前に施しておけば、真夏の出穂期に穂肥を施す手間をなくせるという便利な肥料だ。肥料粒を被覆材でコーティングして、気温（水温）が上昇すると、ピンホールの穴が大きくなり、肥料成分が溶け出す仕組みだ。

皮膜の材質やピンホールの数は、穂肥を施す夏場の気温を予測して決めておく。プロの気象庁でさえ予測が難しい半年後の気象を肥料メーカーが予測することになる。

一発肥料は急速に普及した。稲作農家の高齢化が急速に進行したからだ。高齢農家にとって難事は、真夏に穂肥を施すことだ。一発肥料はそれを解決してくれる。最近では大規模農家も使うようになってきた。穂肥を施す作業を省くためだ。

富山県の普及率が群を抜いているそうだが、08年時点での数字しかないが、6割近く普及していたという。県と農協組織が普及を促した。12年3月の水稲の作柄に関する委員会でも統計部が紹介したものだ。

残念ながら全国レベルでの普及率を示した資料はない。生産局生産資料対策室の話では、水稲の場合は5割ぐらいの普及率のようだ。

一発肥料の問題点が指摘され始めたのは10年ぐらい前から。出穂期前に穂肥が溶け出してしまふことが問題になった。肥料切れのことである。その現象は何日も高温が続いたときに起こる。フェーン現象による高温が続くことがある富山県では、J Aみな穂農協が組合員に配布する「農協だより」13年3月号で、「全量基肥一発肥料の依存度が高いため、稲の生育に合わせた追肥がおろそかになっていきます」と呼びかけていた。笑ってしまうのは、一発肥料を使わせながら、追肥の必要があることを農家に促していることだ。一発肥料の販売に際して、基肥も穂肥も一発で施せると説明しておきながら、出穂期になって追肥を施せというのは、結果として農家に欠陥商品売りつけていたことになる。

作況指数がコメを安く買い集めるツールに

米穀データバンクの作況指数の話に戻そう。作況指数の算出方法は「各都道府県別の7月末までの気象データを『作況推計プログラム』に投入して作況を予想した。（8月）

なぜ水稲作況調査は実態からかけ離れているのか

収穫期まで天候が平年並みに推移した場合の予測値……)と説明されている。

水稲は、高温で日照量が多い年は豊作となり、低温で日照不足の年は不作になる。水稲の生育パターンに沿ったプログラムにして、田植え後の積算温度や日照量など気象データを入力、生育状況や作況指数を推測する仕組みのようである。その技術的な問題点を10年10月号で次のように指摘しておいた。

「例えば、今年の例でも、田植期前後には天候が不順だったが、6月に入ってから急激に回復してきた。梅雨明け前から気温は急上昇、7月末から8月上旬にかけて猛暑だった。積算温度だけの判断では、豊作という予想が立ってしまうのだろう」

米穀データバンクに、作況推計プログラムの中身について説明を求めたが、断られてしまった。先の説明に尽きるというらしい。プログラムには、先に指摘した施肥などの栽培技術のことは反映されていないということになる。

米穀データバンク作況指数で産地別のハイスコアは「103」だった(宮城、福島、群馬、千葉、石川、福井)。各産地から一様に聞こえてくるのは、「稲姿から判断して100に近い作況には違いないが、10

3はあり得ない」(福井県越前市の篤農家)という声だった。その根拠に示したのが高温による肥料切れの現象だった。

気象庁の気象データで裏付けてみよう。福井県越前市は、7月の平均気温が「日平均」26・5度、平年値より2・5度も高かった。「日最高」32・1度は、平年値より2・9度も高い。「日照時間」は201時間、これは平年値より7割も長い。いずれも過去10年間で最高だった。

注目すべきは「日最高」35度以上が3日も連続して続いたことだ。夜温も1・9度高く、穂肥が溶け出たことが容易に想像できる。肥料切れを起こしやすい気象条件が揃っていた。作況推計プログラムは、そういう気象変化を取り込んでいるのだろうか。

米穀データバンクの作況指数について笑えぬエピソードを紹介しよう。全国作況指数「102」を公表したとたん、その情報が産地を駆けめぐった。コメの買い手は、「こ」として豊作でコメが余る。値段が下がる前に早く出した方がよい」と農家に安値で出荷するよう促している。もちろんその後米価が上昇することを見込んでのことだ。

逆のケースもある。17年産のことだった。全国作況指数「102」を

真に受け、豊作になるものと思いだみ、仕入れを手控えた集荷業者や卸業者が相次いだ。いざ集荷シーズンになると、作況指数ほどにコメが穫れていなかったことが分かり、慌てて集荷に走り回り、最後は高値での仕入れに追い込まれた。集荷業者や卸業者の動きから、実際の収穫量は、作況指数ベースで「98」程度と推測する。

「葉色の変化」が盛り込まれず

8月末になると、農水省統計部による8月15日時点での作柄概況の公表がある。東日本とした主産地の早場地帯(19道県)を対象にしたもので、西日本の西南暖地の4県を対象にした作柄概況は7月15日の公表だ。作柄の良否は、「良」(106以上)、「やや良」(105~102)、「平年並み」(101~99)、「やや不良」(98~95)、「不良」(94以下)の5段階表示だ。競馬なら5頭立てで4頭ぐらいの単勝馬券を買うようなものか。予測とは言い難い代物だ。作況指数での公表は9月15日時点の調査からとなる。

統計部による作況調査についても、12年12月号で次のように指摘しておいた。

「統計部は、無作為抽出と説明する

が、実態は栽培技術のしつかりした篤農家を中心にした調査であろう。これだと数字は必ず高めにでてくるものである」

調査に当たるのは約1000人。地方農政局職員が700人、専門調査員300人という内訳だ。後者は、公募によって選ばれた自治体や農協など農業団体職員OB。もちろんボランティアではない。報酬が出る臨時の仕事だ。専門調査員制度は15年から始まった。もともと地方農政局が担当していたが、職員削減のあたりで専門調査員がその役割を担うようになってきた。

先の記事については、意図して「篤農家」の圃場に絞った調査ではなく、最初に無作為抽出で選んだ圃場で所有者の農家が不在か調査の協力を断られた場合、その代替圃場の選定に作為が働く余地があると訂正しておこう。補足すれば、調査員の能力というか観察力の問題もある。

そんなことより統計部のズサンな調査設計のことも強調しておきたい。調査員が田んぼに入って調査するのは、穂数、1穗当たりもみ数、全もみ数、登熟の状況などだ。この中に肥料切れを示す葉色の変化が調査対象に含まれていないことは、東北農政局が公表した「水稲調査の仕組み」の中の記述から分かった。

辛門

部が組織ぐるみで議論を封印してしまったよう

8月15日時点での作況調査で肥料切れを見つけたら、葉色の変化を注意深く観察するしかない。統計部は作況調査をテーマに「水稲の作柄に関する委員会」を設置している。そこで葉色の変化が議論されたことがあった。一発肥料の問題が議論された09年3月の第5回委員会だ

「どうしても省力化のため一発肥料が増えてきますよね。そういう問題が出てくるので、統計としては非常に難しいですね。統計の前提というのは、最大限善良な管理をするようになっていくわけですから、葉色があせてきても肥料はやらないというのだと、予測するのはなかなか難しいね」

この発言の主は畑中考晴氏。農水省の技官OBだ。プロの立場から、「葉色の変化」こそ、作況調査で最大のポイントであると指摘したものである。後段は、一発肥料普及による作況調査に疑問を呈したものだ。

それ以降の委員会の議事録をチェックしてみたが、このことが話題になったことはない。統計部は委員会で問題提起もし

なかつた。統計

部が組織ぐるみで議論を封印して

に受け取れる。この問題に深入りすると、一発肥料の問題点が次々と明らかになり、生産現場に大混乱を引き起こし、収拾がつかなくなることを恐れたみたいだ。

作況調査の結果がいかにも実態とかけ離れているか証明してみよう。表1を見てほしい。16年産の作況指数の確定数字は「103」で豊作だった。本来なら米価は下がるはずだが、相対取引価格は前年産比8%も上がるといふ逆転現象だ。

同年産の主食用米は838万tの生産量。作況指数1ポイント分は約8万tに相当する。この間の民間在庫量はほぼ同じ水準だった。飼料米の生産量は前年産比6万5000t増。

こうしたことから「103」の豊作なら、米価は下がることがあっても上がることは考えられない。相対取引価格が8%も上がっていたということは、作況指数が「103」ではなく「100」程度だったというのがマーケットの見方だ。

平年収量10年間で2ポイント上昇の不思議

最後に農業政策にとって極めて重要な統計資料となる「平年収量」のことを取り上げてみたい。ただの「収量」は、実際に収穫できた量のことだ。平年収量は、「その年の気象の

表1：近年の水稲作況調査結果と相対取引価格

年	米穀データバンク 7月31日現在(指数)	農水省統計部			相対取引価格(円)
		作柄概況	作況指数	平年収量(kg)	
2018	102				
2017	102	「平年並み」又は「やや良」	100	532	15,591
2016	100	「平年並み」又は「やや良」	103	531	14,307
2015	100	「平年並み」ないし「やや良」	100	531	13,175
2014	102	「良」ないし「平年並み」	101	530	11,967
2013	102	「やや良」ないし「平年並み」	102	530	14,341
2012	102	「やや良」ないし「平年並み」	102	530	16,501
2011	101	おおむね「平年並み」	101	530	15,215
2010	102	おおむね「平年並み」	98	530	12,711
2009	96	「平年並み」ないし「やや不良」	98	530	14,470
2008	102	「やや良」ないし「平年並み」	102	530	15,146

い。何かおかしいと思われな

平年収量が10年間で2ポイントも上がることはまずあり得ない。一発肥料が作況調査の結果に与える影響について

の問題は、何も解決していない。その疑問を統計部につ

けたら、「緩効性肥料(一発肥料)が技術的に改良されて穂肥のタイミ

のメーカーだ」と声を荒げると、最後は謝ってきた。

統計部という組織の解体的出直しが必要かもしれない。